

女子看護学生の子宮頸がん検診受診に関連する要因

角南知佳* 新田玲奈** 二宮一枝***

要旨 本研究の目的は、女子看護学生の子宮頸がん検診未受診者の受診意思への関連要因を計画的行動理論に基づいて明らかにすることである。A大学1～4年生の女子看護学生162人を対象として、2018年に無記名自記式質問紙調査を行った。分析方法は、計画的行動理論に基づき説明変数を子宮頸がんやその検診に対する態度的要因、目的変数を未受診者の受診意思の有無としてロジスティック回帰分析を行った。150部配布し(回収率100%)、有効回答129部(86.0%)であった。未受診者115人(76.7%)のうち受診意思ありは76人(66.1%)であった。分析の結果、目的変数と有意な関連を示したのは「他者からの勧め」($p < .001$)、「母親意向との関係性」($p < .085$)「受診検査方法の認知」($p < .082$)であった。以上のことから、子宮頸がん検診未受診者の受診促進には、主観的規範の「他者からの勧め」「母親意向との関係性」、行動コントロール感の「受診検査方法の認知」への働きかけが必要である。

キーワード：女子看護学生、子宮頸がん検診、計画的行動理論、受診意思、ロジスティック回帰分析

1. 緒言

女性に特有のがんである子宮頸がんは、性交渉によって感染するヒトパピローマウイルス(HPV)が原因で起こるがんである。初期に治療できれば、5年生存率92.4%であるが¹⁾、性体験の低年齢化に伴い若年層での子宮頸がん罹患率増加が課題となっている²⁾。その一方で、早期発見に向けた子宮頸がん検診の受診率は、若年層では1割程度と低い^{3,4)}。子宮頸がんの罹患は妊孕性を脅かすリスクがあるため、将来的に子育てを担う若年女性は積極的に子宮頸がん検診を受診し、子宮頸がんの早期発見・早期治療に努める必要がある。

子宮頸がん検診を受診する理由の1つに「母親の検診受診」が報告されており⁵⁾、受診行動の動機として母親の予防行動が影響していると考えられるが、これに関する研究は少ない。未受診の理由について調査した研究^{3,4)}では、検診の「受診・検査方法がわからない」との回答が多数あったことが報告されている。しかし、未受診者の中でも受診意思の有無によって回答が異なるかについて調査したものはない。検診に関する知識と意思について調査した

研究では⁶⁾、検診の必要性を感じている群で知識が有意に高いという結果が示されている。しかし、疾患の知識が受診意思に影響を及ぼしているかについては明らかではない。

子宮頸がん検診の研究では保健行動理論のうちヘルスベリーフモデルを用いたものはあるが⁵⁾、本研究では計画的行動理論(The Theory of Planned Behavior)に着目した。計画的行動理論は、FishbeinとAjzenの合理的行動理論をAjzenがさらに発展させたモデルである⁷⁾。この理論では、「行動への態度」、「主観的規範」、「行動コントロール感」が相互作用し、「行動意思」「行動」に影響を及ぼすと考えられている。子宮頸がん検診においては、受診行動だけではなくその過程にある受診意思に焦点を当て関連要因を検討することで、受診行動の促進につながると考えられるが、我が国の若い女性を対象に研究したものはない。

以上のことから、本研究の目的としては、若年女性における子宮頸がん検診受診率向上に向け、子宮頸がん検診未受診者の受診意思への関連要因を計画的行動理論に基づいて検討する。

* 岡山県立大学大学院保健福祉学研究科看護学専攻

** 土谷総合病院

*** 岡山県立大学保健福祉学部看護学科

II. 研究方法

1. 調査対象および調査方法

A 大学に在籍する1～4年生の女子看護学生162人に対して、無記名自記式質問紙調査を実施した。データ収集期間は2018年9月から10月で、収集場所はA大学構内で行った。授業終了後に質問紙調査の説明、配布を行い、その場で回収した。

本研究では子宮頸がん検診の未受診者の受診意思に着目し、検診の受診意思に対する各項目の関連性の強さを明らかにした。受診意思は4件法で「絶対受ける」「きっと受ける」と回答した者を『意思あり』、「きっと受けない」「絶対受けない」と回答した者を『意思なし』に分類した。

2. 調査内容

調査内容は、学年、年齢、家族同居、子宮頸がん検診受診の有無と未受診者の受診行動意思を尋ねた。子宮頸がん・子宮頸がん検診に対する態度は、井上らの研究⁵⁾の「子宮頸がん検診に対する行動採択とその動機・負担」19項目に「検診を受けるタイミングと月経周期との調整が上手くいかない」「検診の受診方法が分からない」などを追加・修正した22項目とした。回答は項目ごとに「思う」「少し思う」「あまり思わない」「思わない」の4段階で配点を3～0点とした。なお、探索的因子分析の結果、5因子構造が得られたため、各因子に所属する項目同士を合計し、5つの下位尺度得点を算出した。子宮頸がん検診の母親意向との関係性については、母親の検診受診の有無で「受診している」1点、「受診して

いない」「分からない」0点、母親との子宮頸がん検診に関する会話の有無で「話すことがある」1点、「話したことはない」0点、母娘での検診受診で「行く」1点、「行かない」「分からない」0点とした。3項目の合計得点を算出、統合して「母親意向との関係性」項目を作成した。子宮頸がん・子宮頸がん検診の知識5項目では「はい」「いいえ」「分からない」の3件法とした。正答の合計点を5～0点で算出し、「疾患の知識」項目を作成した(図1)。

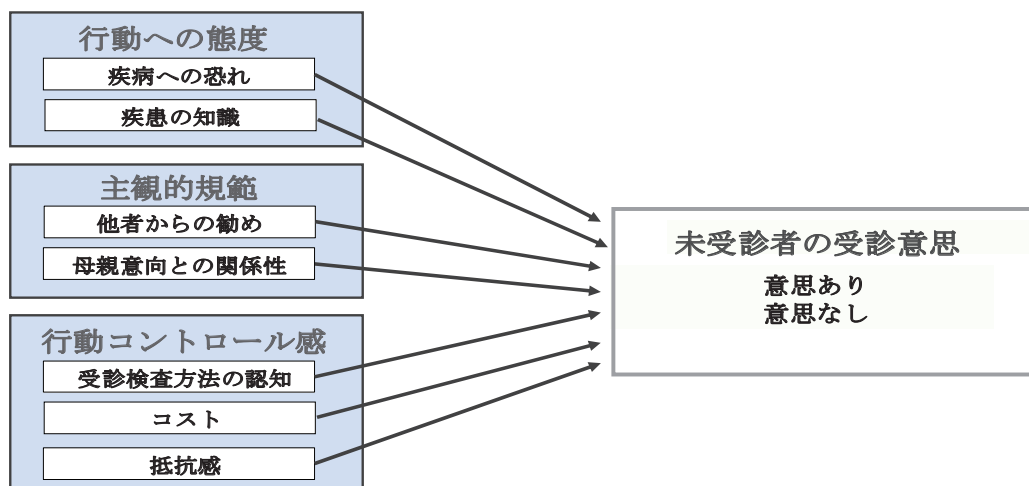
3. 分析方法

作成した態度的要因の尺度の記述統計量を算出した。その後、目的変数を受診意思の有無、説明変数を「疾病への恐れ」「疾患の知識」「他者からの勧め」「母親意向との関係性」「受診・検査方法の認知」「コスト」「抵抗感」として、ロジスティック回帰分析を実施した。サンプルサイズが少ないため、有意水準は5%または10%とした。データ分析には、統計ソフト EZR(v1.37) を使用した。

4. 倫理的配慮

調査者により、研究概要に関する説明を口頭ならびに文書で十分説明を行ったのち、自筆による研究参加の同意を得た。本研究への参加は強制ではなく、対象者の自由意思で決定され、同意が得られない場合においても成績など不利益になるようなことはないこと、同意をした後でも対象者が不利益を受けることなくいつでも撤回することができ、その場合対象者から得た情報も破棄することを口頭と文書

図1 研究の枠組み



にて説明を行った。

本研究は、岡山県立大学倫理委員会の承認を得て実施した（受付番号 18-26）。

Ⅲ. 結果

対象者 162 人のうち、欠席等の理由で 150 部を配布し、回収率は 100% であった。有効回答は 129 人（86.0%）、そのうち未受診者は 115 人であった。

1. 対象者の属性分布

対象者の年齢は 18～22 歳で、平均年齢は 20.06 歳。未受診者のうち、検診の受診行動意思ありが 76 人（66.1%）、意思なしが 39 人（33.9%）であった。受診意思ありの割合について、学年間、年齢間、家族同居の有無で有意差はみられなかった（表 1）。

2. 未受診者の行動意思と態度的要因との関連

態度的要因の合計得点、平均、標準偏差について表 2 に示す。「疾病への恐れ」は平均 5.95、標準偏差 0.32 で、平均点が最も高い項目となった。「疾患の知識」の平均 2.18、標準偏差 1.46 から、知識問題の正答数は半数以下であった。

表 2 の結果をもとに標準得点を算出し、ロジスティック回帰分析を実施した結果を表 3 に示す。態度的要因の中で、有意な関連がみられたのは、「他者からの勧め」(< .001)、「母親意向との関係性」(.085)、「受診検査方法の認知」(.082) であった。

Ⅳ. 考察

1. 対象者の特徴

子宮頸がん検診の対象年齢は 20 歳以上である⁸⁾。本研究の対象者 129 人のうち 41 人は対象年齢外の 19 歳以下であった。同様に女子大学生を対象に子宮頸がんに関する調査を行った亀崎ら³⁾の研究においても、分析対象者 499 人中 194 人（38.9%）が未成年であり、子宮頸がん検診を「知らない」と回答したものは約 4 割を占めた。このことから、子宮頸がん検診の対象年齢外である 19 歳以下を本研究の対象者に含めたことで、未受診者数や受診意思の低さへ影響を及ぼしていた可能性がある。

2. 未受診者の行動意思と態度的要因との関連

態度的要因の中で行動意思の有無に対して有意差がみられたのは「他者からの勧め」「母親意向との関

表 1 対象者の基本属性

変数	グループ	n = 115		p値
		意思あり 76 (66.1%)	意思なし 39 (33.9%)	
学年 (%)	1年生	22 (28.9)	9 (23.1)	.191
	2年生	20 (26.3)	10 (25.6)	
	3年生	20 (26.3)	6 (15.4)	
	4年生	14 (18.4)	14 (35.9)	
年齢 (%)	18歳	7 (9.2)	5 (12.8)	.306
	19歳	20 (26.3)	9 (23.1)	
	20歳	25 (32.9)	7 (17.9)	
	21歳	15 (19.7)	9 (23.1)	
	22歳	9 (11.8)	9 (23.1)	
家族 (%)	自宅生	42 (55.3)	25 (64.1)	.427
	自宅外生	34 (44.7)	14 (35.9)	

表 2 未受診者の行動意思と 7 項目との関連

項目	合計得点	平均	標準偏差
疾病への恐れ	6	5.95	0.32
疾患の知識	5	2.18	1.46
他者からの勧め	15	11.90	2.51
母親の意向との関係性	3	1.30	0.93
受診検査方法の認知	6	4.42	1.65
コスト	9	6.25	1.77
抵抗感	15	8.63	3.40

係性「受診検査方法の認知」であった。

「他者からの勧め」の「他者」は、家族や友人、大学での講義、マスメディア情報を含む。本研究では「他者からの勧め」と合わせて「母親意向との関係性」においても有意差がみられた。家族の中でも母娘関係については、家事、出産、子育てといった女性役割を受け継いでいく関係であることから、他の組み合わせの親子関係と比較して親密である⁹⁾。また、HPV ワクチン接種に関する母娘関係については、母親の子宮頸がんに対する理解と予防意識が娘のワクチン接種を促進する重要な要因であることが示されている^{10,11)}。以上のことから、他者の中でも母娘関係は親密性があり、母親の予防行動・意識が娘へ影響することから、母親からの検診の勧めが最も影響力が強いと推測する。

「受診検査方法の認知」については、先行研究にて子宮頸がん検診の未受診理由の1つとして「受診方法がわからない」が挙げられ、受診行動に関する知識不足が行動の阻害要因となっていることが示されている^{3,5)}。本研究においては、その受診検査方法に関する知識不足が受診意思決定においても影響していることが明らかとなった。

現代では、健康に関するあらゆる情報を様々な媒体から入手することができるが、情報過多による不安や情報リテラシーの低さから、情報を入手し取捨選択し活用する力であるヘルスリテラシーの強化が必要であるとされている¹²⁾。そのため、子宮頸がん

検診の受診率向上に向けては、正しい受診検査方法の情報を提供するだけに留まらず、自らの健康状態を把握するための情報の入手方法や判断も含めた支援を行うことが重要である。

3. 本研究の限界と課題

本研究の対象者はA大学の看護学生に限定しており、対象者数も少ないため、研究の結果を普遍化することは困難である。今後の研究では、他大学の女子学生を対象とするなど対象者の範囲を拡大して再調査する必要がある。また、同じ若年層でも学生だけでなく働いている若年女性を対象に含めることで新たな関係性を導き出すことができると推察される。これらの課題を踏まえて、若年層における子宮頸がん検診受診意思への働きかけを検討し、受診行動へとつなげる効果的な方法を検証していくことが必要である。

V. 結論

女子看護学生における子宮頸がん検診未受診者の受診意思への関連要因を計画的行動理論に基づいて検討した結果、主観的規範の「他者からの勧め」、母親意向との関係性、行動コントロール感の「受診検査方法の認知」において有意差がみられた。若年女性における子宮頸がん検診受診率向上に向けては、この3項目に対して取り組みを行い、当事者が検診への受診意思をもつことが重要であると考えられる。

表3 未受診者の行動意思と7項目との関連 ロジスティック回帰分析の結果

n = 115		
変数	オッズ比	p値
疾病への恐れ	1.03 (0.64-1.67)	.89
疾患の知識	0.90 (0.56-1.42)	.64
他者からの勧め	2.84 (1.58-5.09)	<.001***
母親意向との関係性	1.57 (0.94-2.63)	.085*
受診検査方法の認知	1.69 (0.32-1.07)	.082*
コスト	0.81 (0.73-2.09)	.43
抵抗感	1.42 (0.42-1.15)	.15

※オッズ比は、1標準偏差あたりのオッズ比を示す p<.10* p<.001***

付記

本研究にご協力いただいた A 大学の女子看護学生の皆様、統計についてご指導いただいた新見公立大学矢嶋准教授に心より感謝申し上げます。

文献

- 1) 国立がん研究センター：最新がん統計.
https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/summary.html (2018年11月12日閲覧)
- 2) 原純輔, 片瀬一男 (2012). 「青少年の性行動全国調査」(2011年)の概要. 日本性教育協会.
https://www.jase.faje.or.jp/jigyoo/journal/seikyoiku_journal_201208.pdf (2018年11月12日閲覧)
- 3) 亀崎明子, 田中満由美, 保田昌子, 福田葉子 (2013). 女子大学生の子宮頸がんに関する知識習得状況と予防行動の実態および関連因子の検討. 母性衛生 54(2) : 303-310.
- 4) 長谷川文子, 北川真理子 (2015). 女子大学生の子宮頸がん検診に対する認識と行動の関連. 思春期学 33(1) : 172-185.
- 5) 井上福江, 濱田維子, 田中佳代 (2013). 文系大学の女子学生における子宮頸がん検診に対する行動採択と影響因子—子宮頸がん・検診にかかわる意識調査—. 母性衛生 54(1) : 200-209.
- 6) 田中千春, 国府浩子 (2012). 若年者の子宮頸がん検診に関する知識と思い. 日がん看会誌 26(2) : 35-44.
- 7) Ajzen Icek(1991). The Theory of Planned Behavior, Organizational Behavior and Human Decision Processes. 50, 179-211.
- 8) 厚生労働省：がん検診.
https://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/dl/gan_kenshin01.pdf (2019年8月15日閲覧)
- 9) 水本深喜 (2016). 母親への親密性が青年期後期の娘の精神的自立に与える影響「母親への親密性尺度」による検討. 青年心理学研究 27(2) : 103-118.
- 10) 濱田維子, 井上福江 (2014). 娘を持つ母親の HPV ワクチン接種に対する知識、意識、態度. 純真学園大学雑誌 3 : 99-109.
- 11) Francesco Venturelli, Flavia Baldacchini, Cinzia Campari, et al (2017). Association between mothers' screening uptake and daughters' HPV

vaccination: a quasi-experimental study on the effect of an active invitation campaign. BMJ 7(9).

- 12) 河田志帆, 畑下博世 (2015). 若年女性労働者に対する産業保健活動の検討—20歳代女性労働者のヘルスリテラシーとライフイベントおよび子宮頸がん検診受診行動との関連—. 日本公衆衛生看護学会誌 4(1) : 41-47.